

リゅう げ じ
立花寺古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第182集

1988

福岡市教育委員会

りゅう げ じ
立花寺古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第182集



1988

福岡市教育委員会

序 文

福岡市は、東に月隈丘陵をはさんで粕屋郡と隣接しています。粕屋郡は、福岡市のベッドタウンとして、急速にひらけ、これらの住宅地と福岡市とを結ぶ交通網の整備が課題となってきました。都市計画道路井尻粕屋線は、月隈丘陵を横断して粕屋郡志免町と福岡市とを直結する道路です。

昭和61年、都市計画道路井尻粕屋線の建設に伴って、博多区大字立花寺で2基の古墳を発掘調査しました。いずれも盗掘をうけていましたが、須恵器・土師器などの土器類をはじめ、耳環・小玉などの身体装飾品、鉄鏃などの多彩な遺物が出土しました。

本書が市民の皆さまに文化財に対するご理解を深めていく上で広く活用されるとともに、学術研究の分野においても貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表すものです。

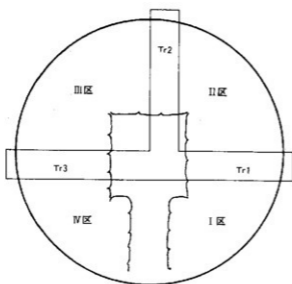
昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例 言

1. 本書は、福岡市土木局道路部街路課による都市計画道路井尻柏屋線の建設工事に先立って1986年7月17日より10月18日にかけて、発掘調査を実施した、立花寺古墳群1号墳及び2号墳の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した遺構実測図は、松村道博・大庭康時・朴廣春・山口満・池田光男により、遺物実測図は大庭が作成した。
3. 本書に使用した遺構写真は松村・大庭が、遺物写真は松村が撮影した。
4. 本書の編集・執筆は、松村と協議して大庭がこれにあたった。
5. 本書に使用した方位は、すべて磁北である。
6. 本書に掲載した遺物は、すべてに通し番号を付けた。この通し番号は、実測図・写真とも一致する。
7. 本文記述中における古墳の区割りおよび各部の呼称は、下図の通りである。
8. 発掘調査に関する記録類・出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、管理・収蔵する予定である。



本文目次

第一章 はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 古墳の立地と環境	2
第二章 発掘調査の記録	4
1. 発掘調査の概要と経過	4
2. 1号墳	7
(1) 墳丘	7
(2) 石室	8
(3) 出土遺物	12
3. 2号墳	16
(1) 墳丘	16
(2) 石室	18
(3) 出土遺物	21
第三章 まとめ	26

插图目次

Fig.1	周边古坟群分布地图 (1/25,000)	3
Fig.2	立花寺古坟群地形测量图 (1/200)	5
Fig.3	1号坟填丘测量图 (1/200)	7
Fig.4	1号坟地山整形测量图 (1/200)	8
Fig.5	1号坟填丘断面图 (1/60)	9
Fig.6	1号坟阴塞部实测图 (1/40)	11
Fig.7	1号坟卵石实测图 (1/10)	12
Fig.8	1号坟石室实测图 (1/40)	13
Fig.9	1号坟出土遗物实测图 (1/3)	15
Fig.10	2号坟填丘测量图 (1/200)	16
Fig.11	2号坟地山整形测量图 (1/200)	16
Fig.12	2号坟填丘断面图 (1/60)	17
Fig.13	2号坟阴塞部实测图 (1/40)	18
Fig.14	2号坟石室实测图 (1/40)	19
Fig.15	2号坟玄室床面实测图 (1/40)	21
Fig.16	2号坟石室内出土遗物1 (1/3)	22
Fig.17	2号坟石室内出土遗物2 (1/2)	23
Fig.18	2号坟石室内出土遗物3 (1/1)	24
Fig.19	2号坟IV区填丘出土遗物 (1/3)	24
Fig.20	2号坟填丘出土遗物 (1/3)	25

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

立花寺古墳群第1次調査は、福岡市土木局道路部街路課が計画した都市計画道路井尻粕屋線に係り実施された緊急発掘調査である。都市計画道路井尻粕屋線は、福岡市の南部と福岡市に東接してそのベッドタウンとして急速に宅地化しつつある粕屋郡志免町とを結ぶ主要道路であり、すでに志免町側はかなりの部分で工事を終了している。路線内の中町境付近は、福岡市博多区大字立花寺に含まれるが、月隈丘陵の東部にあたり、山を削り谷を埋めて道路を新設しなくてはならない箇所である。その為、立花寺古墳群の一部（1号墳・2号墳）は、道路南側の法面にかかり、削りとられることとなったのである。

福岡市教育委員会埋蔵文化財課と街路課は協議を重ね、事前の伐採までを街路課で行なった後、埋蔵文化財課が発掘調査に入ることとなった。調査担当は、当時博多区上呉服町で街路課の発掘調査を担当していた松村・大庭があたることとなり、昭和61年7月17日より伐採作業と併行して地形測量にはいった。発掘調査にかかったのは、伐採作業が全て終了した8月18日である。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	福岡市土木局道路部街路課
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎
調査総括	埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第1係長 折尾学
調査庶務	埋蔵文化財第1係 松延好文
調査担当	埋蔵文化財第1係 松村道博 大庭康時
調査補助	朴廣春（熊本大学大学院）
調査作業	山口満 池田光男 梅野和俊 大部茂久 権藤利雄 山崎光一 柴田松蔵 三浦力 曾根崎昭子 村崎祐子 野口ミヨ 長野康子 桑野正子 黒木静子 関政子 関加代子 江越初代

遺跡調査番号	8 6 2 7	遺跡略号	R G K
調査地地籍	福岡市博多区大字立花寺322・325	分布地区番号	下月隈10
調査期間	1986年7月17日～同年10月18日（8月1日～17日中断）実働53日		

3. 古墳の立地と環境

立花寺古墳群は、粕屋平野を東にのぞむ月隈丘陵の東側斜面に立地する。粕屋平野は、東を三郡山系、南を四王寺山系、西を月隈丘陵に囲まれ、平野中央部を宇美川が流れている。月隈丘陵は、福岡平野と粕屋平野を分つ丘陵で、福岡平野側の西斜面には、横帯文銅鐸の鋳型を出した席田遺跡群赤穂浦遺跡、日光鏡・素環頭刀子等を副葬した宝満尾遺跡、弥生時代前期～中期の甕棺墓群で知られる金隈遺跡などが並んでいる。東斜面は粕屋平野に向けて鋸齒状に張り出すが、西斜面と比べて目立った遺跡の存在は知られていない。

粕屋平野をのぞむ古墳は、平野最奥部に比較的集中して確認されている。すなわち、平野最奥部を囲むようにして位置する古野口古墳群・安楽寺古墳群・花ノ木古墳群・井ノ上古墳群・炭焼古墳群がそれである。また、平野東側には、箱式石棺を持つ光正寺古墳、堅穴式石室から鏡・琴柱形石製品を出土した七夕池古墳をはじめ、神領古墳群などの4世紀後半から5世紀前半に至る古墳がかたまっている。それに対して、立花寺古墳群の含まれる平野西側には、目立った古墳の集中はみとめられない。わずかに萱場古墳群、やや南と偏するが、観音浦古墳群、ウソフキ古墳群が存在する程度である。ただし、平野西部の月隈丘陵東側一帯は福岡市のベッドタウンとして宅地化が進んできた地域であり、日の目を見ないままに消えていった古墳が存在したであろうことは、想像にかたくない。

萱場古墳群^註は、立花寺古墳群に近接するただひとつの古墳群であり、昭和56年2月23日から4月24日まで、福岡県教育委員会の指導のもとに志免町教育委員会の手によって発掘調査された。円墳（1号墳）、帆立貝式前方後円墳（2号墳）、方墳（3号墳）の三基よりなる。1号墳は、径18～20m、高さ2mを有する大型の円墳である。主体部は、長さ6.7m幅0.7mの副室を備えた長大な組合式木棺で、仿製四獣鏡1面、刀子3本、鉄針3本、堅櫛12点が棺内に副葬されていた。2号墳は、全長26m、後円部径21m、後円部高2m、前方部幅約8m、くびれ部幅約7m、前方部高約0.95mをはかる。主体部は長さ2.1m、幅0.31～0.42m、高0.5mの堅穴式石室で、内部には赤色顔料を塗っている。石室内からは、堅櫛8点、鉄剣1本、鉄施1本、鉄鎌1本、刀子1本、鉄斧1個、鉄鋤先1個などが出土している。3号墳は約8m四方の方墳で、四周に周溝をめぐる。主体部は、粘土層を伴った箱形組合式木棺である。棺内からは鉄施、刀子各1点が出土した。これらは、4世紀後半代に3号墳が、続いて2号墳が築かれ、5世紀前半に1号墳が築造されたと考えられている。後述するが、立花寺古墳群が出現する年代とは100年程のひらきがあり、この間を埋める古墳が、まだ周辺におもっている可能性が考えられる。

註「萱場古墳群」 志免町文化財調査報告書第2集 志免町教育委員会 1984



Fig. 1 周辺古墳群分布地図 (1/25,000)

- 1.立花寺古墳群 2.萱場古墳群 3.桜ヶ丘古墳群 4.観音浦古墳群 5.ウツフキ古墳群 6.赤井手古墳 7.井ノ上古墳群 8.炭焼古墳群 9.内野谷古墳群 10.花の木古墳群 11.安楽寺古墳群 12.古野口古墳群 13.神領古墳群 14.耳取池古墳群 15.光正寺古墳 16.七夕池古墳

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

立花寺古墳群は、昭和56年作成の『福岡市文化財分布地図』東部Ⅰで周知化された古墳で、調査前の段階では、月隈丘陵から東に突き出した尾根上に東西に並んで2基が確認されていた。東側すなわち丘陵端側に位置するものを1号墳、西側のものを2号墳と呼ぶ。

前述した様に、調査はまず現状測量より開始した。この段階では、いまだ伐開作業が終了していなかった為、測量しようにも見通しがきかず、また終始ヤブ蚊になやまされた。この地形現況測量は、昭和61年7月17日より8月1日までを要し、伐開終了をまって8月18日より発掘調査にとりかかった。

発掘調査は、下草等を除去することと、1号墳・2号墳の石室内に崩落した土砂・石を取りのけることから始まった。以下、日を追って作業の経過をのべる。

8月18日 下草・下枝除去作業。1号墳と2号墳の中間の南側緩斜面において、3号墳を発見する。

8月19日 1号墳・2号墳の石室内排土にかかる。3号墳の現況測量。

8月25日 2号墳石室内の排土をほぼおえる。石室主軸及びこれに直交して、墳丘にトレンチを設定、盛土状況の調査にかかる。

8月29日 1号墳石室・羨道の排土終了。墳丘にトレンチを設定する。

8月30日 2号墳の表土剥ぎにかかる。

9月3日 2号墳の墳丘を清掃する。2号墳羨道左の墳丘上より検出された墳丘祭祀と思われる須恵器の内、坏蓋1個が盗難にあう。

9月4日 1号墳表土剥ぎにかかる。2号墳墳丘写真撮影・墳丘測量にとりかかる。前日盗難にあった墳丘の祭祀土器が再びあらされる。

9月11日 2号墳石室の実測をはじめ。

9月22日 1号墳墳丘の測量をはじめ。

9月25日 2号墳の封土除去にとりかかる。

9月26日 1号墳石室実測をはじめ。2号墳から地山整形面の測量をはじめ。

9月27日 1号墳封土除去にとりかかる。

10月14日 石室内敷石下地山面を含め、すべての測量・実測を終了する。

10月18日 埋め戻し、調査終了

この間、9月27日には松村が博多遺跡群で調査にはいり、二現場併行で調査を行なった。

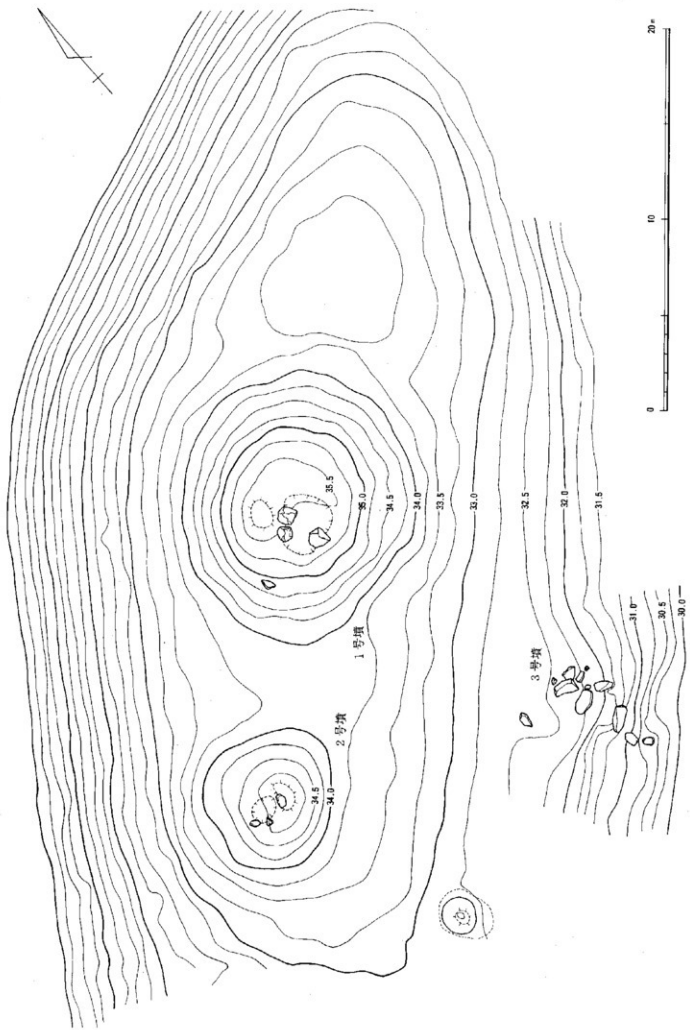


Fig. 2 立花寺古墳群地形測量図 (1/200)

2. 1号墳

(1) 墳丘

1号墳は、丘陵端部に築かれた円墳である。丘陵は、かなりの急斜面をもって北・東・南の三方に落ちこむため、粕野平野側から見上げた場合には、実際以上に大きさを感じさせる。

墳丘はその頂部を失なっているものの、比較的良くその姿をとどめている。平面的には、ほぼ正円形を呈し、直径15m前後、見かけの高さは約2.5mをはかる。天井石のみを失い、また袖石部の天井石は現位置をとどめていた点を考慮すると、墳頂部は、1mまでは失っていないと思われる。表土を削いだ状態での墳丘は、その中位から下で傾斜を急にしますが、おそらくこの傾きで墳頂部まで盛り上げていたものと考えられる。

丘陵の尾根上に築かれている為、周溝は廻らず、尾根の延長方向である北東側と南西側に溝を持つ。溝幅は2m前後で、深さは北東側のもので最大0.4m弱、南西側の溝で最大0.3m程度と浅い。

盛土は、細かな単位で明瞭にみとめら

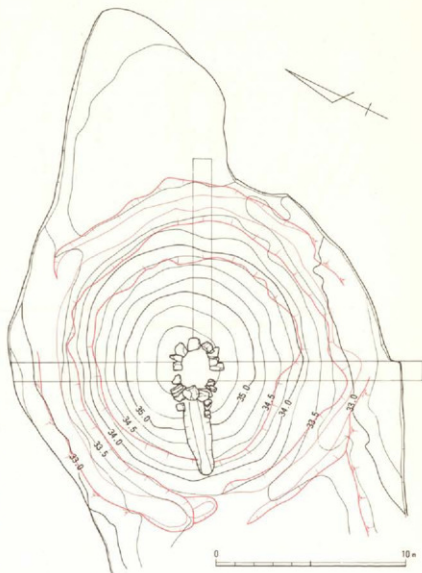


Fig. 3 1号墳墳丘測量図 (1/200)

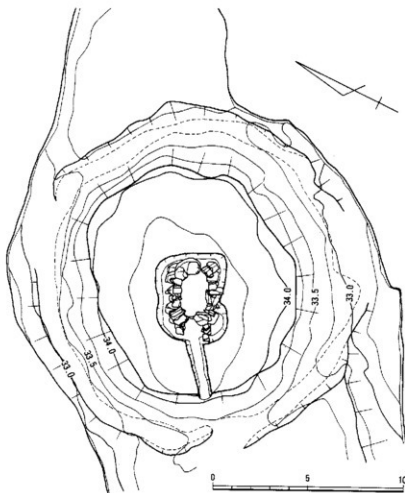


Fig. 4 1号墳地山整形測量図 (1/200)

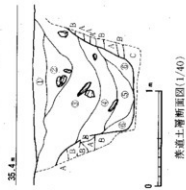
れるが、版築はな
 されていない。石
 室側壁側と羨道部
 分は、盛土途中か
 ら掘りこんで地山
 まで掘っている。
 しかし、石室奥壁
 側では、土層観察
 からはその様な形
 跡は認められず、
 奥壁を積み上げな
 がら盛土していっ
 たと思われる。す
 なわち、1号墳の
 石室は、墳丘の盛
 土が不均等な中途
 半端の段階で、掘
 られたものである
 と思われる。

封土下の地下面
 は、1号墳が尾根

上の最高部に築かれたことを、よく示している。石室掘りかた付近での地山の標高は34.3m前後で、尾根筋上の北東側とは0.6mの南西側とは0.7mの比高差を持つ。おそらく古墳築造前から、わずかながら丸い高まりをなしていたであろう。1号墳はこの高まりを利用しているのであるが、周囲をすべて削り出して、円形に整形している。尾根筋の方向では溝状に地山を穿ち、尾根斜面側に削りこむため一見二段状を呈する。溝は、羨道前面には掘られず、陸橋状に切れている。石室開口部、羨道入り口を意識した結果と思われる。

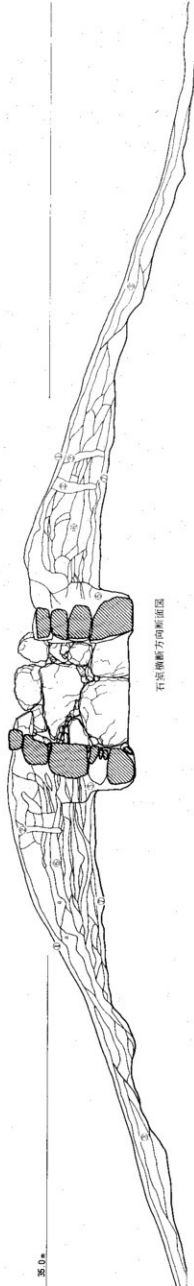
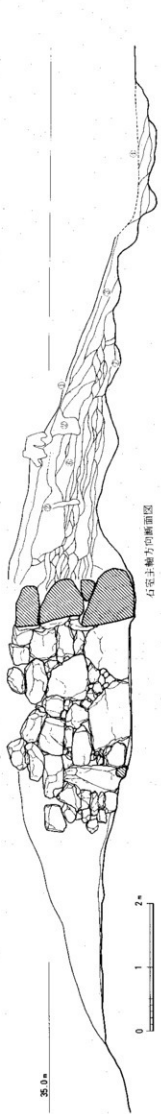
(2) 石室

埋葬主体は、主軸方位をN-64°-Eにとり南西側に開口する、単室の両袖型横穴式石室である。天井石は、袖石上ものを除いて残っていない。ただし、袖石上の天井石は、不安定であり、調査作業に危険をきたした為、調査初期の段階でこれを除去した。側壁及び閉塞石は、



1. 黄土
2. 茶褐色土
3. 茶褐色土 (A・Bは礫丘遺土)
4. 暗茶褐色土
5. 暗茶褐色土
6. 暗褐色土 (2~6が家環埋土)

- A. 赤~茶褐色粘質土
- B. 暗褐色土
- C. 黄灰白粘質土 (埴山)



1. 黄土
2. 木腐成壤
3. 村土の遺土
4. 房塚遺土
5. 石室掘りかた遺土
6. 埴丘遺土 a. 埴塚遺土層
7. 旧遺土 (暗褐色土)

Fig 5 1号埴塚丘断面図 (1/60)

ほぼ残されていた。

玄室は、内法で奥壁幅1.9m、袖部幅1.4m、右側壁長2.2m、左側壁長2.36mをはかる。床面からの現存高は、1.9mである。左側壁は羽了板状を呈するが、右側壁は、一部板石を立てかけて壁としており、腰子を裾えていない為形がみだれている。壁は、若干持ち送り状に内傾して積まれる。床面は、滑石の転石を一面に敷きつめている。袖石は、右袖で4段、左袖で2段積み上げる。袖部の内法は、楣石上で幅0.46m、高さは1.2m前後と思われる。

閉塞は、一枚の板石と数個の礎によってなされていた。板石は、長辺87cm、短辺56cm、

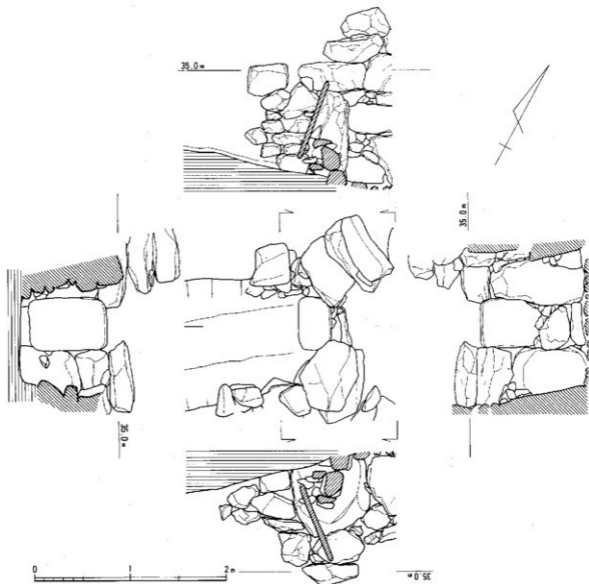


Fig 6 1号墳閉塞部実測図 (1/40)

厚さ4.2cmのほぼ長方形を呈し、四辺は周囲から打ち欠いて角を取っている。石室側をむいていた面には、点々と赤色顔料の痕跡が認められ、全面に赤色塗彩されていたことがわさる。この扉石は、Fig. 6でみる様に本来の羨道床面からは浮いた状態で出土している。これと、柵石上に置かれた閉塞の礫群との位置関係を考えると、柵石直上に置かれた玄門幅とほぼ同じ礫が、第一次埋葬時の位置をとどめているだけで、他の礫と扉石は羨道床面がある程度埋った段階（追葬時）の閉塞であると思われる。

羨道は、袖石から0.6~0.7m程石を貼っているだけで、素掘りである。横断面の土層観察（Fig. 5）から、墳丘盛土後に掘削されたものである。羨道床面はほぼ水平で、途中からやや下って玄門に至る。天井に石がおかれた形跡はなく、玄門の閉塞部に至るまで、溝状に開いていたと考えられる。玄門からの羨道の長さは、約4.2mをはかる。

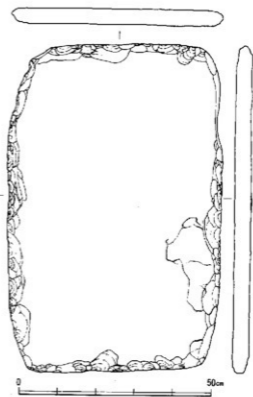


Fig. 7 1号墳扉石実測図（1/10）

(3) 出土遺物

1号墳では、玄室及び羨道からは1点の遺物も出土していない。遺物はすべて墳丘より出土した。Fig. 9の1~3・5~8は、Tr-3付近のⅢ区から出土したもので、Fig. 5 Tr-3土層断面のa層を中心に出土している。9は、Ⅳ区の羨道横より出土したもので、墳丘上あるいは盛土途中に意図的に置かれたものである可能性が高い。4はⅠ区より出土した。

1~3は須恵器の坏蓋である。頂部から体部上半にかけて右回転の回転ヘラケズリを施し、体部下半及び内面は、ヨコナデで整形する。口唇部内面には、沈線状に段が一段めぐる。法量は1は復原径12cm器高4.6cm、2は復原径11.6cm器高4cm、3は復原径11.5cmをはかる。

4~6は須恵器の坏身である。底部から体部下半を右回転のヘラケズリし、体部上半から内面をヨコナデ、内底部をナデ調整する。口唇部内面には、沈線状の段がつく。法量は、4で復原口径10.6cm器高5.3cm、5は復原口径10cm器高5.3cm、6は復原口径10.5cm器高4.5cmをはかる。坏蓋、坏身とも、胎土には小砂粒がまじる。

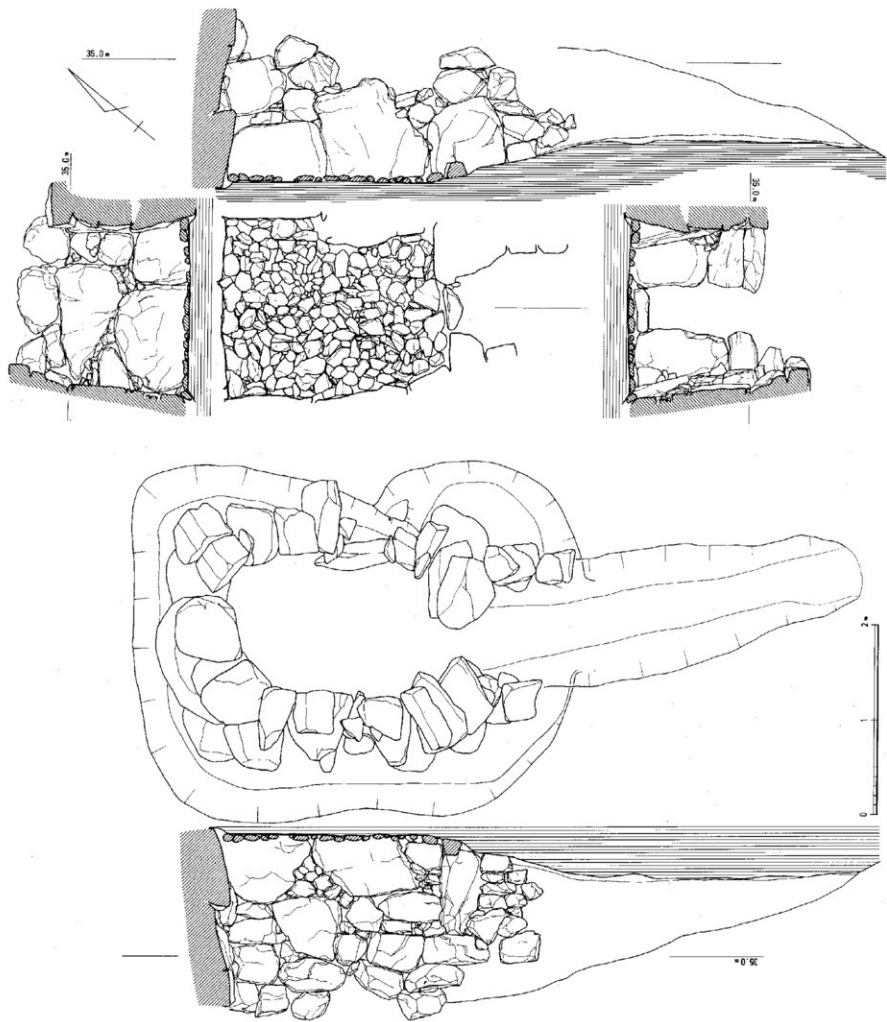


Fig. 8 1号墓之平面圖 (1/40)

7・8は上師器の鉢である。7は、体部からそのまま丸味を持って口縁をつくる。8の口縁部は、丸味を持って張った体部からやや内傾させ、小さく外反しておさめる。いずれも、内外面ともヘラミガキを施して、平滑に仕上げる。7は復原口径12.8cm器高5.0cm、8は復原口径12.5cmをはかる。胎土は精良である。

9は、須恵器の甕である。体部の中に口縁部が落ちこんだ状態で出土した。口縁部の破片と胴部とは接合できず、復原的に実測している。外面の体部下半は平行タタキ、上半にはカキメがつく。体部内面には、全面に同心円タタキ痕がのこる。頸部から口縁部には、内外面ともヨコナデが施される。口縁部は小さな複合口縁状を呈し、外面には沈線状の凹みが一列めぐる。胎上には、径1mm程度の砂粒を含む。焼成はややあまい。法量は、復原口径14.7cm、胴部最大径20.0cm、復原器高22.7cmをはかる。

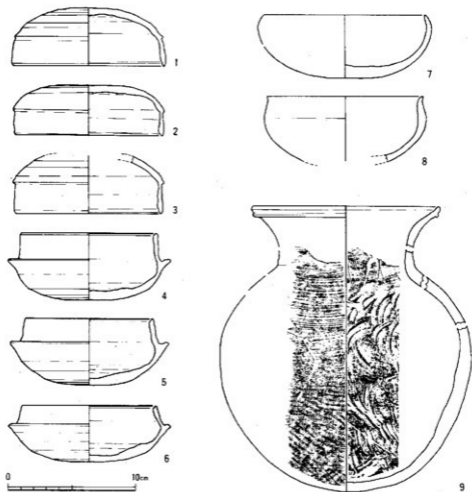


Fig. 9 1号墳出土遺物 (1/3)

3. 2号墳

(1) 墳丘

2号墳は1号墳の南西に隣接して築かれた古墳である。1号墳との間に切り合い関係は持たない。丘陵尾根の延長上に造られており、径9.5~10m、見かけの高さ1.2~1.5mをはかる。天井石は全く残っておらず、仮に天井石を失っただけで側壁は残っているものとする、更に0.5m以上の高さはあったものと思われる。周溝は、おおむね三方にめぐっている。1号墳側の尾根は、周溝で断ち切っていない。また、南西の尾根方向も、周溝というよりもむしろ地山整形による削り出しの下端と言うべきであろう。2号墳背面側は、地形的に尾根が南に向ってやや幅を広げた部分であり、明らかに溝を穿っている。この部分で、溝幅1.3~1.7m深さ0.1~0.3mをはかる。

盛土は、地山を掘削して石室の腰石をすえた後になされている。版築はなされていない。土層断面をみると、石室の構築と盛土は平行してなされた様で、相互に切り合い関係は認められない。

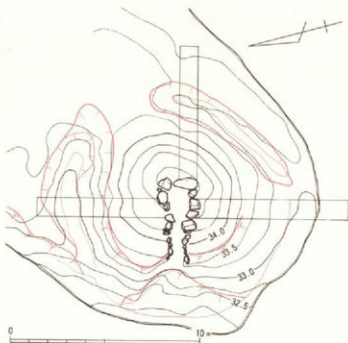


Fig.10 2号墳墳丘測量図 (1/200)

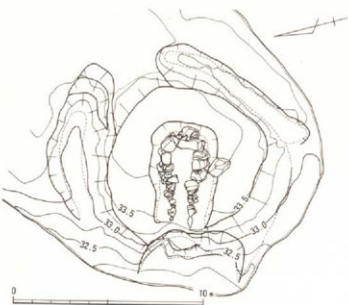


Fig.11 2号墳地山整形測量図 (1/200)

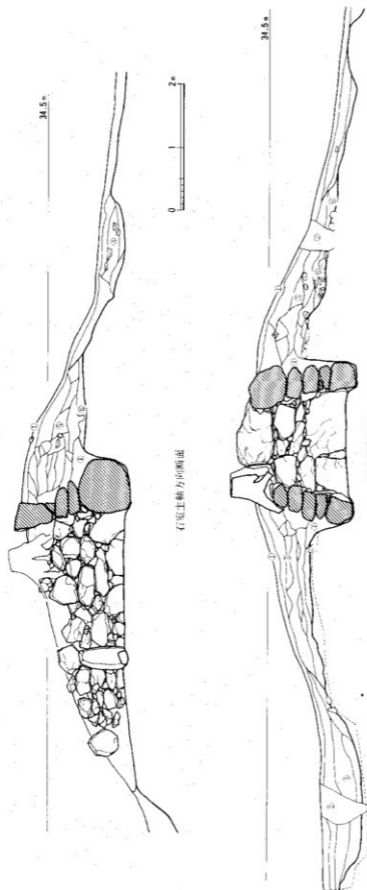


Fig.12 2号横塚丘断面図 (1/60)

- | | |
|---------|---------------|
| 1. 表土 | 4. 石室掘りかた埋土 |
| 2. 木根 | 5. 横丘塞土 |
| 3. 周溝埋土 | 6. 旧表土 (暗褐色土) |

地山整形は、丘陵の尾根の三方を削りこみ、前述した様に1号墳側の尾根は一部つながっている。羨道前面は、層状に大きく削りおとしている。したがって、羨道入口は左右にひらいた形状をとっている。

(2) 石室

埋葬主体は、主軸方位をN-74°30'-Wにとり北西側に開口する、単室の両袖型横穴式石室である。天井石は、全く残っていない。側壁及び閉塞石は、比較的よく残されていた。

玄室は、内法で奥壁幅1.56m、袖部幅1.08m、右側壁長2.1m、左側壁長2.14mをはかる。第1次床面からの現存高は、奥壁で1.76mである。平面的には、胴張りのある羽子板形を呈する。側壁は、持ち送りで内傾して築かれている。

床面は、都合3回貼られていた。第1次床面は古墳築造当初のものである。自然礫を全面にすき間なく敷きつめたものである。床面より鉄鍔2本、耳環2個が検出された。第2次床面は、玄室左半分に1.7×0.6mの長方形に花崗岩の円礫を敷いたものである。屍床と考えてよかろう。第3次床面は、奥壁から手前1.7mの間に滑石の礫を敷いたものである。滑石には、扁平で大振りなものがあり、奥壁際と右側壁際及び床面の中程を玄室主軸に直交して配されている。この配置からみて、奥壁側と手前側の二基の屍床に分つことができる。ともに1.4×0.8mの長方形が推定される。鉄鍔2本、刀子2口、耳環3個、管玉3個、小玉6個、須臾器坏蓋1個が出上している。

玄門は、幅0.6m、欄石上面から現存する袖部最上までの高さは0.9mをはかる。閉塞は、一枚の不整形の板石と礫によってなされていた。上述の様に、2号墳には2回の追葬と、その都度床が手直しされており、閉塞はその最終時のものと考えられる。その為か、閉塞は整然としておらず、扉石も緩い角度でたおれかかっている。

羨道は、袖石から0.7~0.8mまでは石をつみあげているが、その他の部分は素掘りもしくは地山の礫の上に石をのせているだけである。羨道は幅0.6~0.8mで奥直に2m程のびて、左右に大きくひろがる。羨道床面は、地山を掘り込んだままの面で、ゆるやかに外

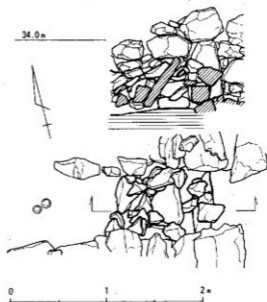


Fig. 13 2号墳閉塞部実測図 (1/40)

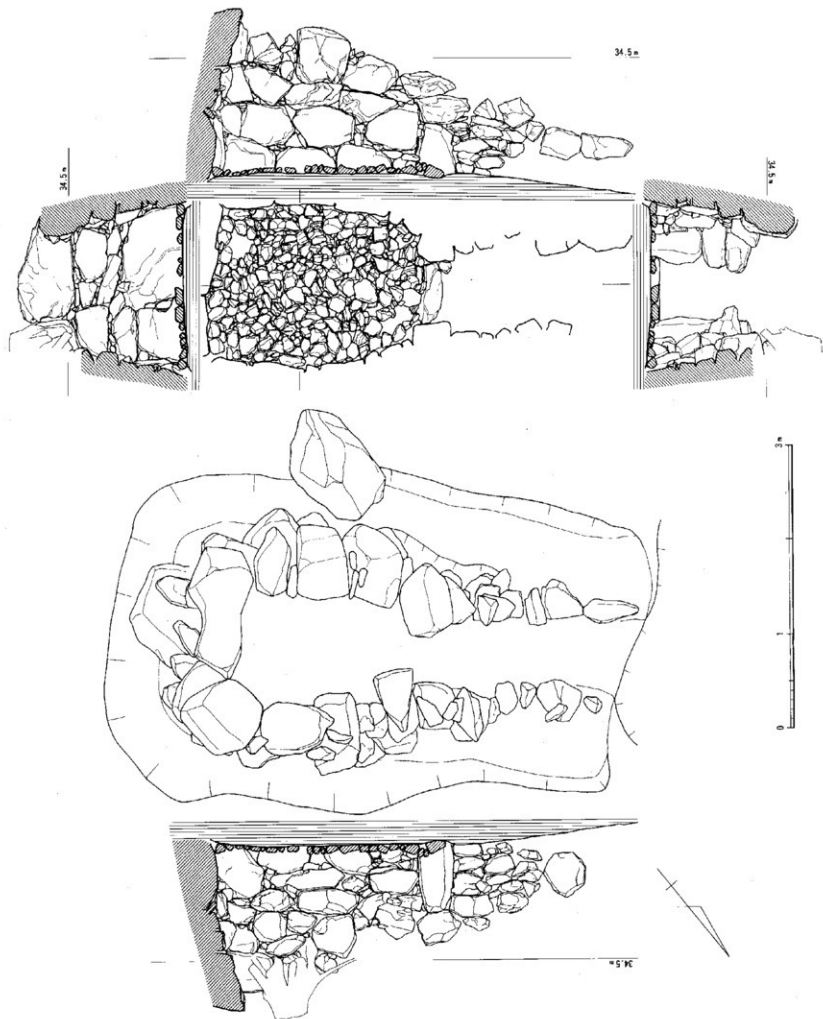


Fig. 14 2号烽火台基座图 (1/40)

に向って下ってゆく。羨道床面からも須恵器が出土しているが、地山床面からは若干ういており、第1次埋葬にともなうものとは考えがたい。

(3) 出土遺物

遺物は、玄室内・玄室埋土中・羨道及び墳丘より出土している。Fig.16~18に示したのは、埋土中を含めて石室内より出土したものである。

10~13は須恵器の坏蓋である。10は玄室の第3次床面上より出土した。頂部には板目が残りに、体部は内外面ともヨコナデ、内頂部はナデ整形する。11~13は、羨道から出土したものである。内面にかえりを持つ。頂部はナデ、体部及び内面をヨコナデする。ヘラ記号を持つ。

14~17は須恵器の坏身である。14・15は蓋受のかえりを持つ。14の底部には板目がつく。体部はヨコナデで、内底部にナデ調整を施す。15は、底部から体部下

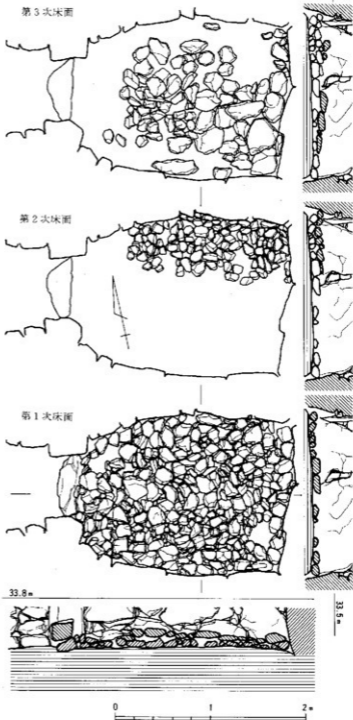


Fig.15 2号墳玄室床面実測図(1/40)

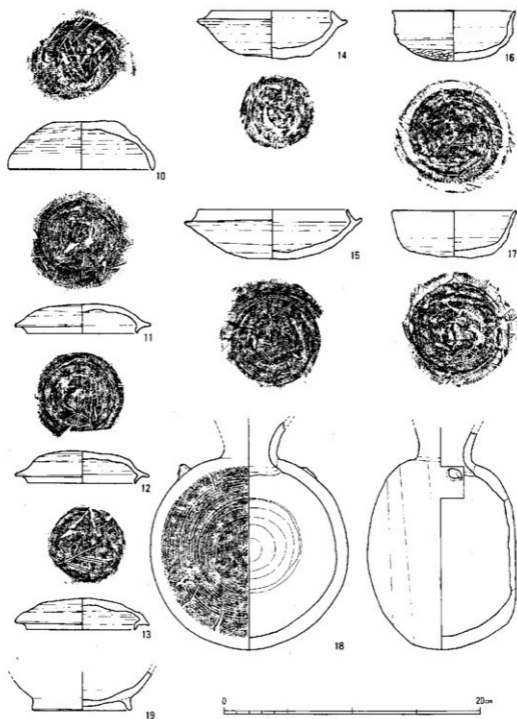


Fig.16 2号墳石室内出土遺物1 (1 / 3)

体部上半から内体部をヨコナデし、内底部をナデで仕上げる。16・17は、丸味の強い底部から外反気味に真上に立ち上る体部を持つ。16の底部は4～6mm幅のケズリが多方向からなされる。17の底部はヘラケズリである。いずれも体部はヨコナデ、内底部をナデる。15が玄室奥壁際より浮いた状態で出土した他は、羨道より出土した。

18は須恵器の提瓶である。把手と口縁を欠く。玄室奥壁際より浮いた状態で出土した。19は内黒土器である。玄室内埋土にまじって出土した。

20～23は鉄鏝である。20・21は第3次床面から、22・23は第1次床面から出土した。

24・25は第3次床面から出土した刀子片である。

26～40は装身具である。26～31は第3次床面から出土したガラス小玉で、コバルトブルーないしターコイスブルーを呈する。32は羨道入口より出土したガラス小玉である。33～35は、第3次床面より出土した碧玉製管玉である。耳環は銅地金張であり、36～38が第3次床面、39・40が第1次床面から出土した、36と37、39と40は、それぞれセットと考えられる。

Fig.19に示したのは、第IV区墳丘上の羨道横より出土した、墳丘祭祀もしくは供献と思われる須恵器である。41

～43は坏蓋、44～46は坏身である。坏蓋は、頂部をヘラケズリ、体部をヨコナデし、内底部をナデる。坏身も同様の調整がなされる。47は、体部下半にカキメがみられ、また底部折損部が鋭く下方に折り返す点から、高坏と考えられる。

48・49は1区の羨道横より出土した土師器の鉢である。48の外体部には粗いタテハケが、49には2条の沈線とヘラ文様

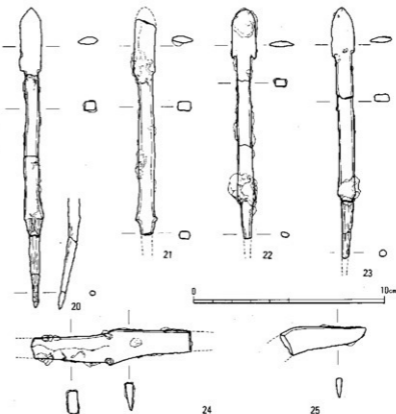


Fig.17 2号墳石室内出土遺物2(1/2)

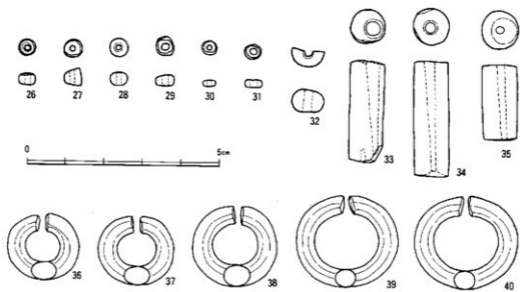


Fig.18 2号填石室内出土遗物3 (1/3)

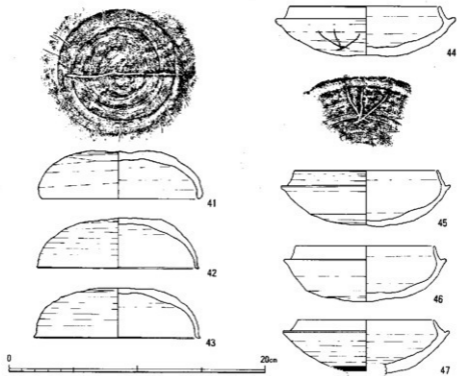


Fig.19 2号填IV区填丘出土遗物 (1/3)

がみとめられる。48に比べて49はヨコナデを主とした調整で、丁寧なつくりである。

50～54は須恵器である。50は坏蓋でIV区、51は坏身で羨道前庭部、52は坏身でIV区より出土した。53はIV区より出土した甕である。54は、I区の墳丘裾部近くより出土しており、後世の混入である。付高台を持つ坏で、8世紀代に下る。

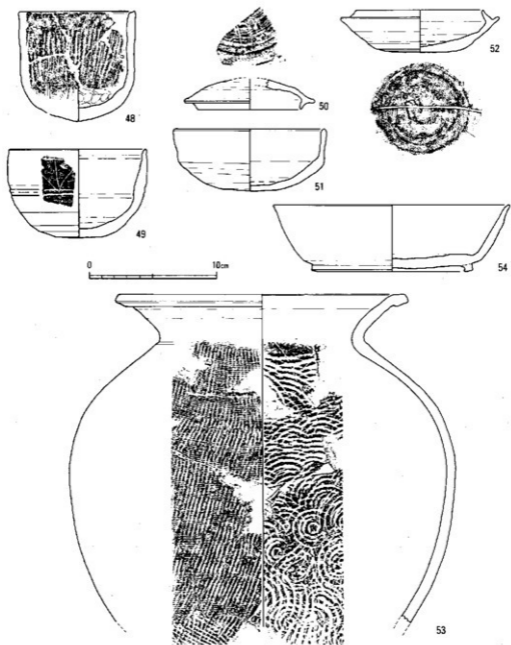


Fig.20 2号墳墳丘出土遺物 (1/3)

第三章 ま と め

以上に述べてきた立花寺古墳群1号墳・2号墳の調査成果について、簡単な整理をしてみよう。

年代 1号墳の石室からは、一片の土器すら出土しなかった。そこで、墳丘から出土した土器を検討すると、2の坏蓋の頂部、4の坏身の底部はやや平坦に作られ、1・3・5・6に比べて古い要素を持つが、御笠川東岸の須恵器についての編年案（以下、これによる）に従えば、IB期に含まれ、5世紀末にあてることができよう。

2号墳では、3回にわたる埋葬行為を確認することができた。玄室内出土で明らかに床面に伴っているのは、第3次床面直上より出土した10の坏蓋である。底部に板圧痕をとどめる点、ヘラ記号の一致から、羨道出土の14とセットをなすと思われ、6世紀末のIV期にあてられる。羨道から出土した11～13・16・17は、すべてIV期に属する。IV区墳丘から一括出土した41～47をみると、42・43の口縁端部は平坦面をなす小さく外方に尖る特徴をもつ。これは41に比べて古手の要素であるが、両者は明らかに相伴しており、ⅢB期6世紀後半にあてることが妥当であろう。この羨道横の墳丘祭祀あるいは供献の須恵器は、2号墳で最も古い型式であり、おそらく第1次埋葬時（2号墳築造時）に埋納されたものであろう。

1号墳と2号墳の前後関係をみると、1号墳はこの尾根上の最も突端の最も高い場所に築かれており、古地の上で明らかに2号墳に優越している。1号墳と2号墳の間に直接の切り合い関係はないが、古地の優位からして1号墳の方が古いと言えよう。したがって、5世紀末をあまり下らない時期にまず1号墳が築かれ、6世紀後半頃になって、2号墳が築かれた。2号墳では、6世紀末までの100年足らずの間に2回の追葬を含めて3回の埋葬行為が行なわれたと考えられる。なお、3号墳の周溝は1号墳の周溝を切り込んで廻らされている。

その他 立花寺古墳群の特徴として、石室敷石に滑石を用いていることがあげられる。付近の住民の話では、近辺の丘陵に滑石の露頭がみられるとのことで、本古墳の乗っている尾根の地山中にも質は悪いが滑石がみとめられた。周辺の山の転石を拾ってきて敷石に用いたことが窺われるが、2号墳の第1次床面は自然礫で石質は意識されず、第2次床面においては花崗岩の円礫のみが用いられていた。石質の選択に何らかの意図があったことは明らかであるが、その意味するところは残念ながら推測の限りではない。

立花寺古墳群と近接する営場古墳群との間には、100年近い年代の開きがある。双方の被葬者の掘る勢力基盤は共通であり、おそらく単一の系譜に並ぶ者であろう。この年代のすき間を埋める古墳群が発見された時、10世代以上にわたる首長墓の流れが明らかになるに違いない。

註 「御笠川東岸における須恵器の編年について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XⅦ
福岡県教育委員会 1977年

図 版



立花寺古墳群(手前から1号墳・2号墳)



(1) 立花寺古墳群遠景(北東より)



(2) 立花寺古墳群遠景(北西より)



(1) 1号墳調査前(南より)



(2) 1号墳墳丘・石室(南西より)



(3) 1号墳石室(南西より)



(4) 1号墳羨道横須恵器甕出土状況



(5) 1号墳羨道横須恵器甕出土状況



(1) 1号墳羨道土層堆積状況(玄室側より)



(4) 1号墳羨道左側壁



(2) 1号墳羨道部閉塞(羨道側より)



(5) 1号墳羨道(玄室側より)



(3) 1号墳羨道部閉塞(玄室より)



(6) 1号墳玄室



(1) 1号墳玄室奥壁



(2) 1号墳玄室敷石(玄室奥壁上より)



(3) 1号墳地山整形状況(南西より)



(1) 2号墳丘・石室(西北より)



(2) 2号墳丘(東南より)



(3) 2号墳Ⅳ区須恵器出土状況



(1) 2号墳羨道部閉塞(羨道より)



(4) 2号墳閉塞扉石(羨道より)



(2) 2号墳羨道部閉塞(玄室より)



(5) 2号墳羨道左側壁



(3) 2号墳羨道部閉塞(右袖より)



(6) 2号墳羨道右側壁



(1) 2号墳玄室第3次床面(奥壁上より)



(4) 2号墳玄室第3次床面須恵器出土状況



(2) 2号墳玄室第3次床面耳環出土状況



(5) 2号墳玄室第3次床面須恵器出土状況



(3) 2号墳玄室第3次床面耳環出土状況



(6) 2号墳玄室奥壁・第3次床面



(1) 2号墳玄室・第2次床面(右側壁上より)



(4) 2号墳第1次床面鉄釘出土状況



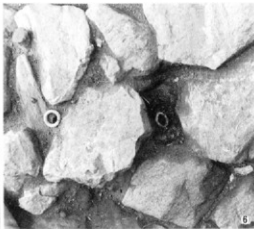
(2) 2号墳第1次床面(右側壁上より)



(5) 2号墳第1次床面鉄釘出土状況



(3) 2号墳第1次床面柵石(羨道より)



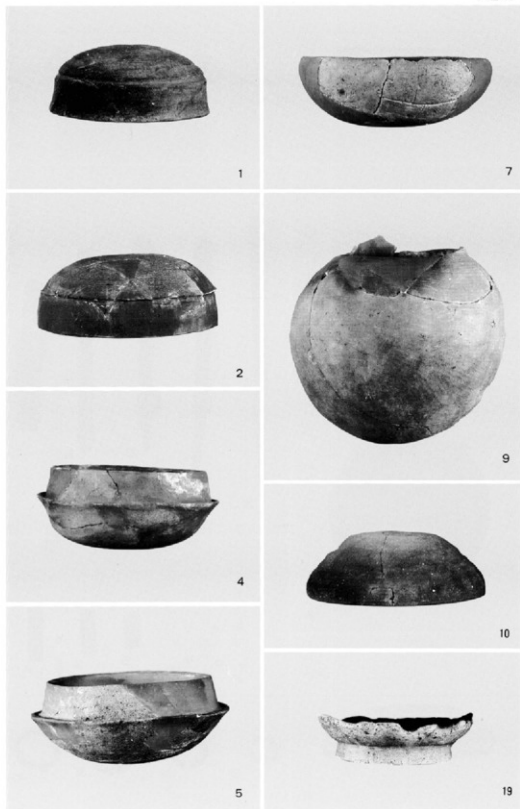
(6) 2号墳第1次床面耳環出土状況

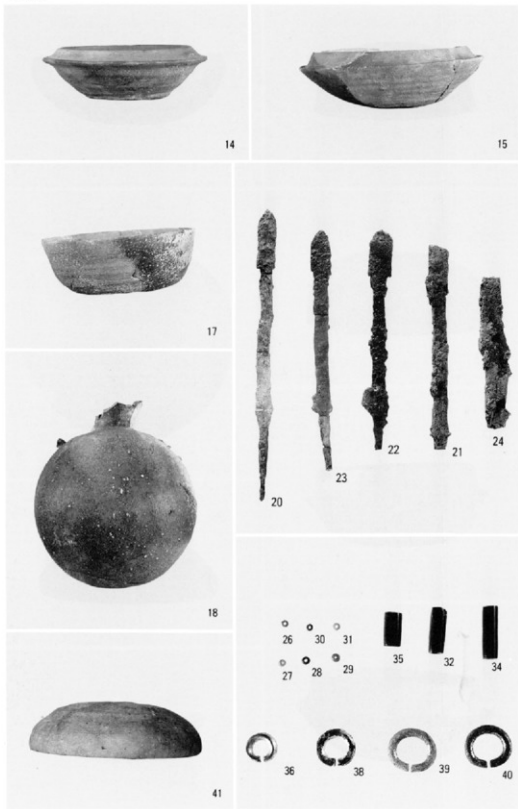


(1) 3号墳現状(西北より)

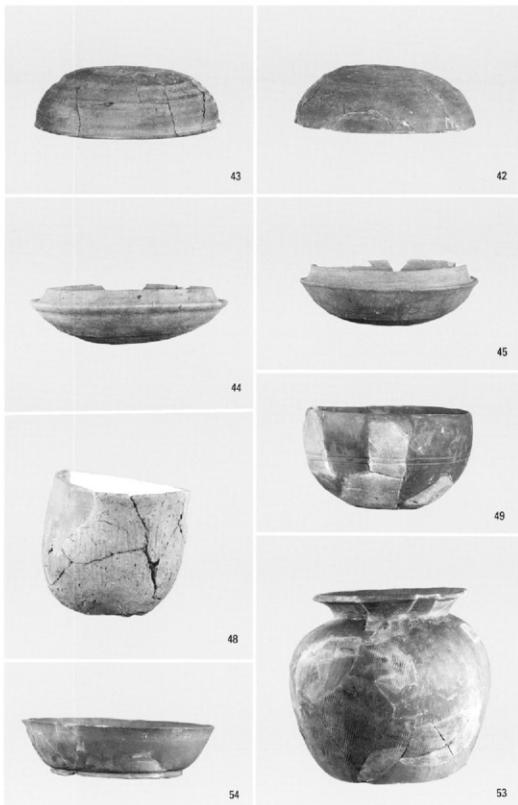


(2) 3号墳石材露出状況(北東より)





2号墳出土遺物



2号墳出土遺物

立花寺古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第182集

1988年(昭和63年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

印刷 株式会社 川島弘文社
